山多きスウィスに一度春が訪れて、アルプスやジュラの傾斜地に綠濃い牧草が萠え出る候になると、冬期谷の中に枯草を食んで靜かに春を待つてゐた羊、山羊等は漸次牧草を追うて、傾斜地を上つて行く。そして遂に雪線近くまで登るのであるが、その附近こそ家畜にとつて最もよい牧場であるとされてゐる。ここにスウィスの自然美に一層の和やさと美しさを添へながら、羊や山羊はその生長を續けるのである。牧人達もこれに從つて、山を登つて行く。或は木を伐り、草を刈つて小屋を作つて一夏を過すのである。そして、牧人達の多くは一家族中の年長の男子であつて、殘つた家族が谷間にある僅ばかりの畑を耕やしてゐるのである。かゝる生活の方法こそヨーロッパにおいて、最も典型的な牧民の生活であるといはれる。

さて、これらの家畜から何が生産されるか、その多くは乳をとつて、チーズやコンデンス・ミルクや、チョコレート等として輸出されるが、また山羊の皮は、毛革としてなかなかその用途が廣いのである。

盛なる精密工業

しかしスウィスの産業中最も注目すべきは工業であらう。鐵、石炭を始め、原料品の產出少く、これも外國よりの輸入に俟たねばならぬが、豐富な水力を利用して電氣を起すことが盛であり從つて電力は頗る安價に使用できるため、種々な機械工業が盛に行はれてゐる。

卽ちこのスウィスにおいては、全人口三、八八〇、〇〇〇人の二六パーセントが農業に從事してゐるに對して、工業に從事するものは、實に、約その四五パーセントの多きに達してゐる。そして、その主なる工業は織物、金屬工業、精巧工業等である。がこれは本來の自國人ばかりでなく、スウィスの工業目指して移住した人も少くないといはれる。

スウィス人は殊に精巧なる技術をもつものの數が傳統的に多く、時計、

デパートメント・ハウスの入口　ハンガリアヤリガンの產物がこの店の前で一目瞭然わかる。寫眞は入口であるがそのガラス窓のこちらこの店で賣つてゐる主な品が美しい繪で書き列べられてゐる。

家鴨追ふ娘　ハガンヤリでは家畜も産業の一部で、とくに後戰前の國民の生活に割合に多く、ハンガリヤは牧畜の國として、羊・トンセーパ七六、豚・トンセーパ二六〇五、馬・トンセーパ一〇〇、その他の家畜は失はれたまま、戰後の疲弊は言語に絶し、とくに前戰前の五分の一を得ずたつましてつ遣りきるまはとあるこの國の土産品の一位は家畜である。

寶石の加工、樂器、光學機械その他科學用器具の如きものの工業が最も盛である。またそれらの中この國の特色として、未だに家内工業を行ふところが多いのである。そしてこれらの精巧なる器具類は、フランス語の話される地方に多く、都市としてはジュネーヴ、ニューシャテル、ベルンがその中心をなしてゐる。

特に日本人にとつて、スウィスの時計はよく知られてゐるものであるから、その輸出の統計を上げて見よう。

年次	箇數（百以下は四捨五入）	重量（單位キンタル）	價額（千フラン）
一九二〇	一四、六一七、〇〇〇	二、六六二	三二五、五八二
一九二三	一四、三六八、〇〇〇	二、二三八	二一六、五五二
一九二四	一八、九五一、〇〇〇	一、八二四	二七三、一五〇
一九二五	二一、一六一、〇〇〇	二、〇二四	三〇二、三三〇
一九二六	一八、八五二、〇〇〇	二、〇三四	二五八、二六〇
一九二七	二〇、一九九、〇〇〇	二、〇五七	二七三、二四五
一九二八	二二、八六五、〇〇〇	二、六九九	三〇〇、四三七

輸出國	一九二七年 價額（千フラン）	一九二七年 個數（千個）	一九二八年 價格（千フラン）	一九二八年 個數（千個）
米國へ	五六、二八〇	四、一一八	四二、五九〇	三、一四二
ドイツへ	二九、二四二	一、四五七	三〇、一七三	一、五〇七
イギリスへ	二三、七四六	三、二四六	二七、〇二四	三、六三五
イタリヤへ	一一、九二四	四三七	一六、九八〇	五八〇
日本へ	一五、五五二	一、〇九六	一五、六三七	一、〇四一
支那へ	六、七三一	六四九	一〇、九〇七	一、二七〇

その他、織物等は、セント・ゴタード州、セント・ガル州に盛で、バー

ゼル、チューリッヒ等はその中心を成してゐる。殊に盛なのは絹織物で、精美を極めたものが生産されるが、原料としてはスウィス自身からは殆ど出ずに、イタリヤからの生糸に加工されるのである。工場の如きも大小二〇〇以上の多きに達してゐる。

セント・ガル州方面は綿織物がなかなか盛であつて、工人も五萬乃至六萬人もあり、年々五千萬ドルを生産してゐる。

以上が大體スウィスの産業の概況であるが、ここにこの國の他國と異つた、重要な意義をもつところも述べて置かねばならない。

即ちそれは、この國がヨーロッパの否世界の公園として、殊に夏に來り遊ぶ人の多いことである。

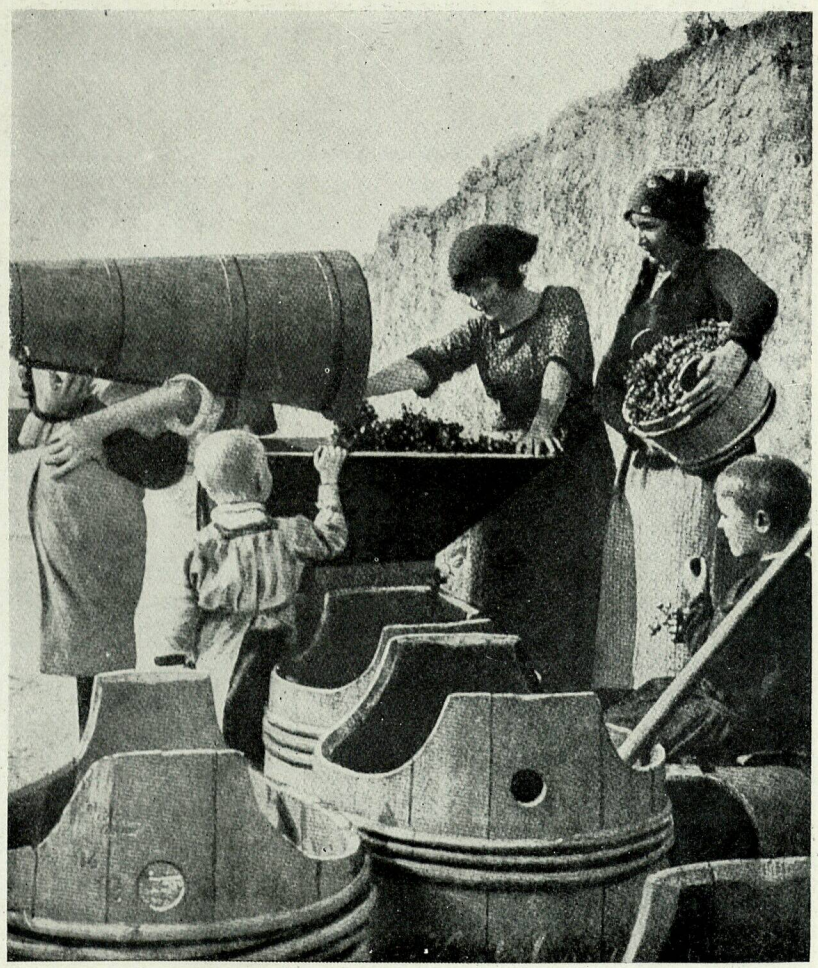
一八七四年この國の憲法が制定せられて以來、否一八一五年英、普、露、葡各國間にこの國を永世中立國とするの協定ができて以來、この國は最も自由なる法律を有して、多くの他國の亡命客を許容してきたのである。

ことに他國人の自然の美とともに、居心地よき旅行をなすの設備も完全で、完備したホテルの如きも二、〇〇〇を下らないといはれてゐるほどであるから、夏期に外國人のそれらのために落して行く金額は、相當の額に上るといはれる。

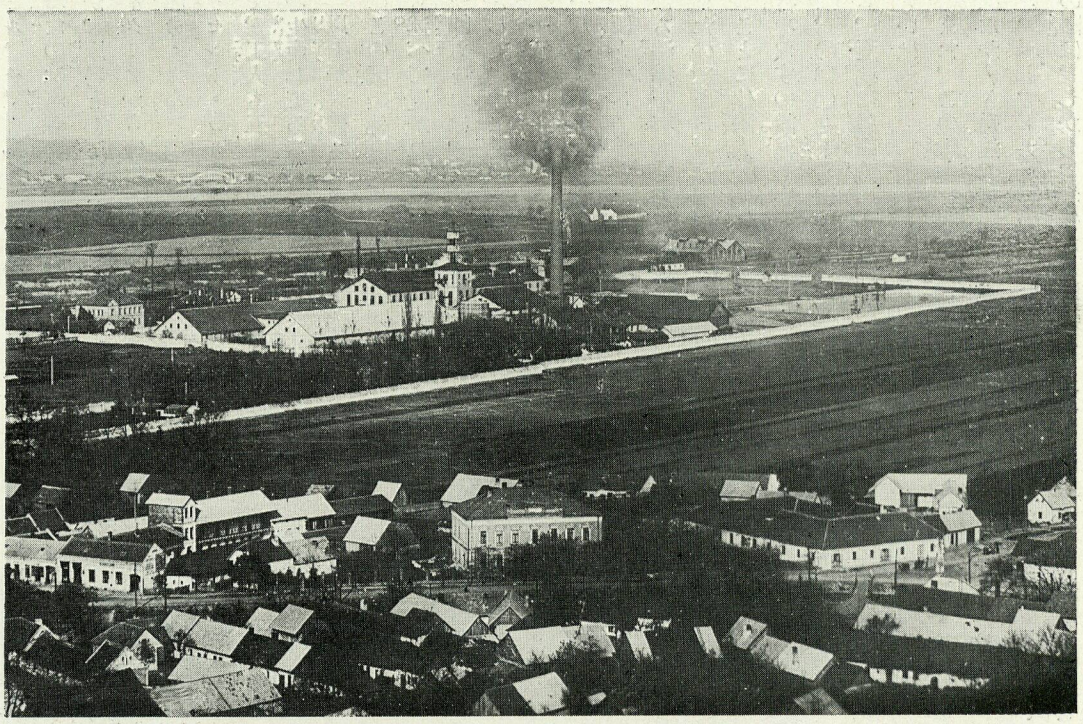
また、この國の交通機關として一九二五、年五、八四二キロに亙る鐵道はなか〳〵發達してゐる。土地が峻しいところも多いが、ローヌ、ライン、ポー、ドナウ等の沿線は鐵道を敷設するにさまで困難ではない。この國は、しかし、如何なる困難をもつてしても、よき鐵道を敷くことが最もこの國を繁榮せしめるに至る理由であるから、ます〳〵鐵道網は國内を埋めて行く。

この國を通ずる峠の如きは、古來歴史上にその名の高いものが多く、現今では、セント・ゴタード・トンネルの、九、七五マイルの如き、シムプロン・トンネルの一二、二五マイルの如き、素晴らしいトンネルができて、北歐との交通の便をたすけてゐるのである。

（佐藤弘）



實る喜び　スウイスの葡萄實るころ。土地のもつ無限の豐饒さは實秋毎に稱へられる。濡の型斗の白面い入物に入れて運ばれる葡萄はやがて葡萄酒の釀造場へ。かくしてスウイスの國の民は今日も富む。



トレンチンレトラプテチ トレンチンレトラプテチは町のラプテチンレトラプテチは町のマルヤキャヴァロス・コエチ河畔にあるとともに河畔にあるいとる。鐵道の集合地であるとともに河畔にあるいとる。この邊は地味豐饒なので農業も盛んであるこの附近に工業の發達を促し大規模な煉瓦工場も相當にあるこの附近は便の交通とともに

天産國チェコ・スロヴァキヤ

惠まれた地勢と氣候

地勢と氣候とは産業を支配する。例へばズデーテン山地は水力を供給するので、紡績業や綿糸布業等がこの山地に發達し、ライヘンベルグは毛織工業の中心である。また森林が多いので製紙工業が非常に發達し、ボヘミヤの盆地には平地や丘陵が多いので、甜菜は到るところに栽培され、從つて製糖業が盛である。ビールの釀造も所々に行はれ、殊にピカルゼンは有名である。モラヴィヤでは、大麥、甜菜、葡萄等の産業が榮えカルパティヤ山脈の東方は森林で覆はれてゐる。

その上、嘗てドイツに屬したシレジヤ炭田も、一部分は今やボヘミヤの領地となつて、そこから石炭を盛に採掘し、カルパティヤは鐵を供給するから、鐵工業も行はれる。オーデル川の上流地方には、屋根用石板が盛に採取されてゐる。

次にそれらの各種の産業を一瞥しよう。

盛なる農業

チェコ・スロヴァキヤの氣候は大陸性と海洋性との中間に屬し、雨量は平均七四〇ミリに達し、概して春夏に多く降る。この都合よい雨の分布は、境界に横はる山脈の列に起因する。

土地は概して豐饒で、その肥沃なる部分には甜菜、小麥、大麥、ライ麥、燕麥が作られ、海拔四五〇メートル以上の高地においても、尙ほライ麥、燕麥及び馬鈴薯を作るに充分である。六五〇メートル以上の高地は主として永久の牧場であるが、それさへ或る部分では馬鈴薯、燕麥が作られる。チェコ・スロヴァキヤ國民の最も多くが農業に從事するのはこれがためで、それが他の職業に從事するものと如何なる割合をなすか、

カルパティヤの夫妻　カルパティヤの山中に住む夫婦。草で作られた純朴な色の小屋は明文にあまりにも馴れわれわれに膝を入らすを苦活生くらす恐も安不の何。うらあもで城王の一唯がれそはてつとに等れかしかし。いなはで所るれ
む義を等れかいまるあの要必つもらすを苦活生くらす恐も安不の何。うらあもで城王の一唯がれそはてつとに等れかしかし。いなはで所るれ

待つ間後生樂　かんかんと輝る日差しもものかはちょろ禿げた羊の皮が人間を包んでつ立んさくたでん包を間人が皮の羊たけ禿ろよちはかもの輝る日差しかんかんと

ヤキアヴロス・コエチはれこ。るゐてつ立んさくたでん包を間人が皮の羊たけ禿ろよちはかもの輝る日差しかんかんと

の近在おの百姓さんたちのマーケットの。かの女等はそれがれたまるれ切賣はでまるれ切賣はそれがれたまるれ切賣はでまるれ切賣はそれがれたまるれ切賣はでまるれ切賣

酪工場　八〇〇　（四千萬靖のレルクが酪製造のために用ゐらる）
麥粉水車　一〇、〇〇〇
キクジサ・コフイ工場　四〇　六十萬キンタルを產す。

に達する。

以上のやうに、チェコ・スロヴァキヤは、小麥、ライ麥、大麥、燕麥、馬鈴薯、牛、豚、砂糖、ビール、アルコールの產額において歐洲の他の大國と伍し、特に砂糖、アルコールは最も名高く、砂糖は獨六五、デンマーク四六、フランス二〇、英四・七キンタルなるに比して、實に一二七キンタルを產し、世界總產額の七パーセント（甜菜糖は一五パーセント）を市場に供給してゐる。またアルコールは獨一〇ヘクト・リットル、デンマーク七、フランス五、英九ヘクト・リットルに比して、チェコ・スロヴァキヤでは一三ヘクト・リットルといふ割合をなし、農產物の總價格は二十六億五百萬金貨クラウンに達し、鑛業、工業、林業等の總價格の合計に倍するといふ狀態であり、殊にバター、チーズの產は、鐵、石炭の年產額の價を超え、家禽及び卵の產額は、ビール製造及び砂糖工業の額にまさつてゐる。

このほか南部ボヘミヤ地方には多くの漁業地があり、全國において漁業をなしうる河の全長は、一九、〇〇〇キロに及ぶ。年產額は三〇、〇〇〇キンタルで、價格は約五千萬チェコ・クラウンである。魚類の九割は鮒で、そのほか梭魚、鱒、鱸がある。これらの魚はこゝで食ふに餘つて、ウィーンとかサクソニヤ方面にも輸出されてゐる。

森の幸

國內全面積の三三・一六パーセントは森林で、その面積四、六六一、三三〇ヘクタールにあたるので、林業においても伊佛等の諸國を凌ぎ、英、瑞、ユーゴ・スラヴィヤ及びオーストリヤの四森林國と相匹敵するのである。殊に近年に至つては、從來の不生產地に植林の計畫をなしたものが

甜菜を掘る　チェコ・スロヴァキヤは世界の砂糖總產額の七パーセントを甜菜糖は一五パーセントを占めてゐる。從つて國內は到る所甜菜の栽培が盛で そしてこの豐饒な地味は目の屆く限りの甜菜にすべる。寫眞はそれを取入れてゐるところで若い農婦は何を想ひつゝ畑を掘るか。

四十萬ヘクタールもあるから、その面積が五百萬ヘクタールとなる日も遠い將來ではあるまい。

森林の九一・六七パーセント即ち四、〇〇一、九〇八ヘクタールは高地森林で、割合長年月を經た木材を産する。これに對し、低地森林は六・三〇パーセント即ち二九五、三九七ヘクタールで、軟質もしくは硬質の木材を産するのである。兩者の中間の高さの土地にある森林は、僅に一・四六パーセント即ち六八、一九九ヘクタールで、主としてモラヴィヤのモラヴィヤ河(マルヒ河)、及びディジュ河に沿うた平原、或はボヘミヤのエルベ流域等で、スロヴァキヤの中間高地にも高價な木材の産する森林がある。右のうち、落葉樹林は一、二〇六、八八一ヘクタールに擴がり、松柏科は二、一四八、五四七八ヘクタールに、そして兩者の混合林は六四六、四七九ヘクタールに及んでゐる。

これらのうち、西部地方の主なる木材は松、樅で、松柏類の混合林からは銀樅、落葉松等がとれ落葉樹林では楡、槲が多く、秦皮、大楓樹、ノルウェー楓、楡、しなのき、しで、ポプラ、白楊、柳等が多い。混合林には樺、花楸樹の類も多い。

これに對して、東部及びスロヴァキヤ・ルテニヤでは、楡が四二パーセント、樅が三三パーセント、槲が二五パーセントといふ有樣であるが、近年はまた外國産のものが移植されて成功してゐるのである。尚ほ注意すべきは、植林が非常に組織的になされてゐることで、政府は組織的な植林法を設けて、盛に奬勵してゐる。今、森

ボヘミヤ・ガラス ボヘミヤ・ガラスがもつ價値を今更説くまでもない。起原は前世紀に�डにはあまり立派な作品があつたが實際にそれは前世紀の山林地方で等作製された作品。

林地域の表を示すと、次の如くなる。

國名	高地	低地	中間地	合計
ボヘミヤ	四、九五九、二三三 立方メートル	八六、八三二 立方メートル	六四、八〇二 立方メートル	五、二一〇、八六七 立方メートル
モラヴィヤ	二、一三三、四二〇	七四、五六〇	二八、〇〇一	二、四三五、〇〇一
シレジヤ	七四五、三二八	一二、七三五	四、五〇八	七六一、五七一
スロヴァキヤ	四、五五九、四二〇	四九一、九二二	五二、〇五八	五、一〇三、三八〇
ルテニヤ	一、八六四、二二〇	一〇、六六六	一、三五四	一、八七二、一四〇
計	一四、二五六、六二一	七七五、七三五	二四〇、六三二	一五、二七二、九五九

となる。木材は主として國内で消費されるけれども、一部は國外に輸出せられる。

木材の生産及び消費の關係表

普通の收穫	九、三〇〇、〇〇〇立方メートル
パルプ及び紙製造業	一、〇〇〇、〇〇〇
鑛山業	七二〇、〇〇〇
汽車枕木	三〇〇、〇〇〇
木挽所	六、五〇〇、〇〇〇
電柱	三〇〇、〇〇〇
國内消費	八、八〇〇、〇〇〇
過剰輸出額	五〇〇、〇〇〇

藝術としてのガラス工業　等しくガラス工業にも板ガラス等からは藝術品としての器迄あるのは其技術の精良と浮彫等の巧みな事他に類を絶してゐる。わけてボヘミヤの快き琥珀色のガラスは

豐富なる炭山

エルツ山脈といふ名は鑛石の山といふことで、昔は石炭、鐵、銅、金、銀、等が豐富であつたが、今は殆んど掘りつくされた感がある。しかし今でも、ミースプルツプラムには銀山があり、後者には

チェコ國産の尤　この國が國産の發展に盡す努力は非常なものであるに殊にガラス製品の如き最も重きを置いて研究させるでは近代は各國を凌駕して益々美しい精良の食器等を産出する

歐洲最深の竪坑があつて、垂直に下ること實に、一一、〇〇〇メートルの深さに達してゐる。

現在この國における鑛産のうち、最も大切なものは石炭であつて、數個の炭田は、主として北シレジヤ、北モラヴィヤ、西北ボヘミヤ地方等に見られる。

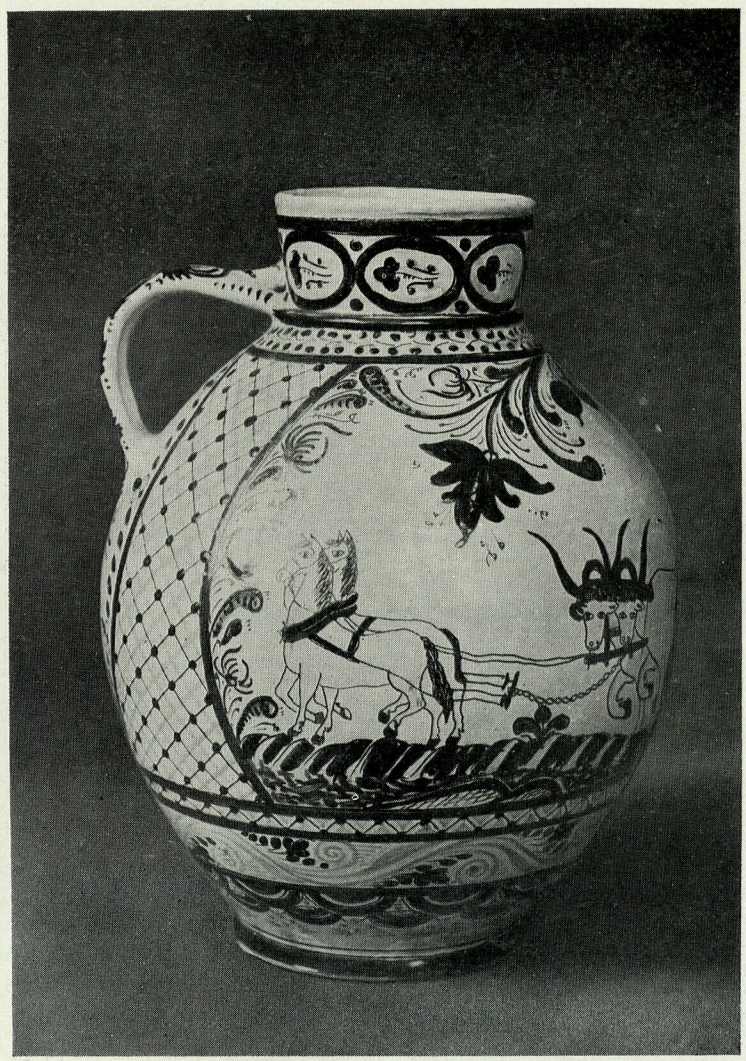
これらの炭田のうち最も重要なものは、モラヴィヤ、シレジヤ、ポーランド炭田の南西への延長部で、チェコ・スロヴァキヤはその約一五、六パーセントを有してゐる。この炭田は一、二〇〇メートルの深さ以内で、石炭の總量四、七三三、〇〇〇乃至六、一四四、〇〇〇トンと見積られる。

プラーグの北西クラズノ、ラユヴィニク盆地にもまた六メートルから一〇メートルの厚さの層をなせる良質の石炭を産し、ピルゼン盆地の地域から、約四五〇平方キロの廣さに亙り、七、〇〇〇カロリーの熱を出す石炭が採取される。

このほかブリュンの西方ロシェ、シオスラヴァニィには、採掘の容易なる三十一の炭山があり、質良く、七、〇〇〇カロリーを出し得る。

またスロヴァキヤにおいては數箇所に褐炭が見出され、小さい褐炭層は南モラヴィヤのキジョフ地方にもあるが、その主なるものはボヘミヤのオレ山脈に沿うたエッゲルからエルベの右岸に至る三褐炭盆地にある。

歐洲における最も重要なるラディュームの産地もまた、ボヘミヤのヨハヒムスタールであつて、これはピッチブレンドまたはウラミネートから採られるのである。この鑛物は、變成岩及び火成岩を貫ける銀鑛脈の中から産出する。



餘り古典的な壺　チェコ國は工藝的生産に大に力を入れてゐる。陶器も數多くの傳統的な製作法や式型や模様に外の成熟に達し改良し進歩せる物の種類を參考に世界の各國の作品を研究してゐる。

一般工業

工業生産は常に水力に重大な關係をもつてゐる。しかるにこの國では水力が多く、森林に富み、石炭その他の鑛産もあり、原料は決して少くない。

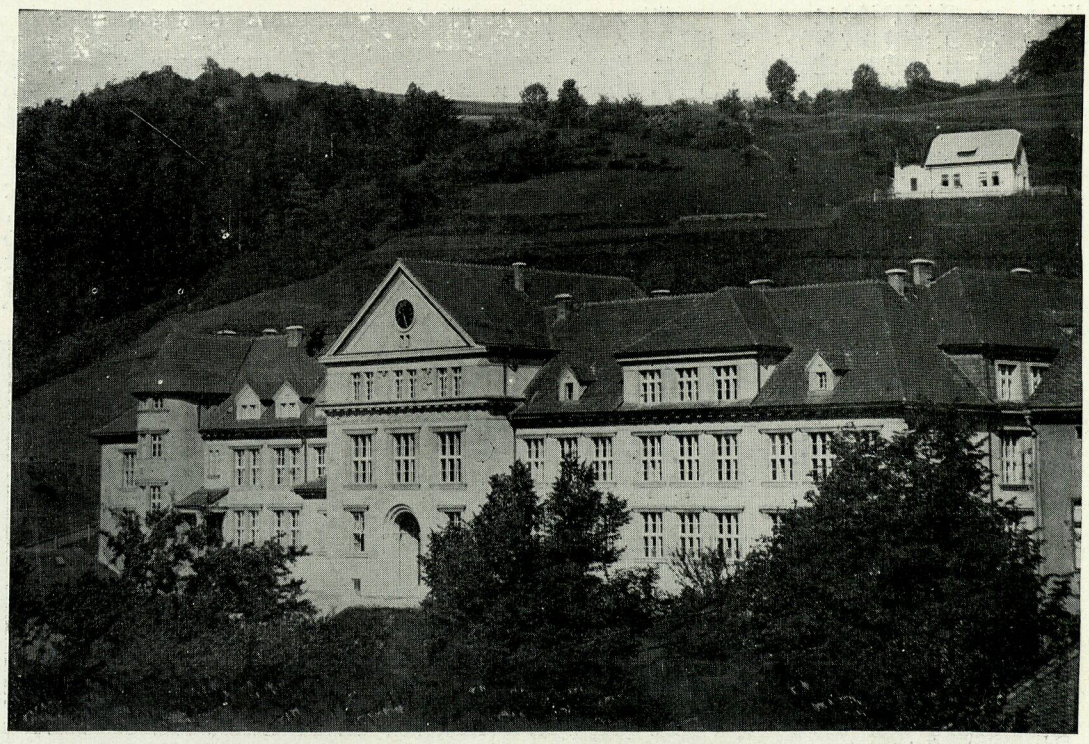
從つて舊オーストリヤ・ハンガリヤにおいては、原料品、半製品、工業品の輸出入關係が輸入超過であつたに拘らず、チェコ・スロヴァキヤだけでは輸出超過の狀態を示してゐる。

工業の最も主なものは鐵、ガラス等であつて、鐵工業の一番盛なのはボヘミヤである。ボヘミヤにおける鐵の鑄造、鍛冶は第十四、五世紀から小規模ながらも有名であつた。現在の產地はロキカニイの近くのエラデク・コアロヴにおけるクラドノ及びロタヴィヤ、ネジェリ、トリネッツ、ヴィトコヴィッツ等であり、その附近において各鐵工業が行はれる。スロヴァキヤでは政府の鑄造所がチソヴェク、クムパシイ、プラコヴィツ、ツトラテネ等にあり、鋼鐵鑄造所も諸所にある。

機械工業は、プラーグ、ピルゼン、ブルーノ、ブラティスラバ等の大都市及びその附近に發達して、自動車、電動鋤、機關車、車輪、特殊機械、蒸汽機關、起重機等をつくり、職工十五萬、製品は年百萬トンを超え、これ等の多くはバルカン諸國、フランス等に輸出されてゐる。

陶工美の一極致

ギリシャの藝術の家アモーユの味るなかたゆつもの感に近代人の更に覺の人の感に湧てつよ甘ぬへいもと何に彩色の葉釉るなかたゆつもの美にしてしの氣香の高い精いなと藝術るかに實。るてつなと藝術るかに實。るてつなと藝術るかに實。るてつ



ガラス製造徒弟學校

ボヘミヤといへばガラスを想ひガラスといへばボヘミヤを想ふほどに有名な産物ガラスのボヘミヤとエジプトにガラス・ヤ・ヘボミヤを冠した世界に名高い小さい町があるこゝにガラス製造徒弟學校があつて成績優良なる人々を養成し來る數年間ますます愈々盛んになるであろう。

ート、果糕、麥粉などの工場をあけてゐると數限りもないから、最後に一つ特に有名な産物として、ガラスの話にうつらう。

ボヘミヤといへば直ちにガラスを聯想する。ボヘミヤにおけるガラス製造は、實に第十四世紀の昔に起原してゐるが、三十年戰役前頃には、ボヘミヤは既にイタリヤ藝術の影響を受けて、ガラス改良にも新生命を開き、當時既にボヘミヤ・ガラスは名實共に世界を支配する感があつたが、その後第十八世紀に入り、海外の趣味、嗜好及び需要を考慮して、專ら生産に努めたので、その製品の繪畫の優麗なると、裝飾の精緻なるとは一層世界に知られるに至つた。

對外取引

國名	輸入	輸出
ドイツ	三、三三七、五一〇、七一六 KC	三、五五二、三九九、七四三 KC
オーストリヤ	一、一三五、一一五、八九一	二、九〇一、六〇八、一八三
ベルギー	一九三、三四四、〇八七	九六、一〇六、二〇一
エジプト	九〇、〇八二、二七六	二九、三三五、〇三三
北米合衆國	七五九、五三七、六八八	八四五、〇一一、八五六
フランス	六七七、〇〇八、九五七	二五三、五一九、一〇〇
英國	六〇二、四四七、二五二	一、五三九、八四七、四八八
ハンガリヤ	一、〇一八、三七二、七二三	一、三三七、七八六、四四五
イタリヤ	三三七、三一八、五七一	四四一、一三五、八〇一
オランダ	五〇四、一一〇八、三四七	二七四、一八一、三五七
ポーランド	一、〇九六、三三七、四八九	三六三、四〇八、四六三
ルーマニヤ	四八一、七四〇、一六六	八三四、二七七、〇六六
セルボクロアト	五八四、〇〇七、一三二	九六三、一五〇、二四八
スローベン	七八、六二九、六八一	一五五、三三九、八二九
ソヴィエット・ロシヤ	三二六、九八〇、九四九	五一六、〇九〇、九六一
スウィス	四、一三九、一六〇、二一七	三、七五九、四二七、六四四
その他諸國		

氷を越へて　新婚の喜びをもつたウスイスのサンモ・ツリッにハネームーンの人蓬御自慢の御料理を胸に微笑む新夫人と氷のかなたの樂しい休憩所に得意のスケートで急ぐ新郎の喜ばしげな顔。この幸福さうな一對は我々をさへ微笑ませる。嬉しい湖上のスナップ。

かくの如く、チェコ・スロヴァキヤは歐洲中央の好位置に惠まれ、産物も豐かに人民も勤勉であるから、國際經濟上誠に重要なる地位を占めてをり、その輸出入額のいかに廣汎であるかは、前に示した一九二六年の表によつても、知られるであらう。

特に記すべきことは、輸入においては、原料品は四七・一パーセント、食料品は二二・三パーセントで、製造品は二六・四パーセントであるが、輸出においては、製造品が六〇パーセント、食料品が一九パーセント、原料品が一九パーセントの割合になつてゐることで、この國の産業が如何に重要であるかゞ、察せられるであらう。

（田中館秀三）

アイガー　アルプスの雄アイガーは同じくユングフラウの北西六哩の海拔三千九百七十五メートルの高峯で、一八五八年英人パーリントンとつよにこれを頂極めて初めてつゝ現はれたる。山麓の氷河今は鐵道が通じて登山者のそれと姿を花畑の圖。

五、アルプス山地

登山史

ハンニバルのアルプス越え

アルプスは昔から越された。この二十世紀の間或はその以前より、アルプスは武人によつて、或は王侯貴族によつて、または商人や巡禮達によつて越されてゐる。しかし昔の人々がアルプスを越したといつても、大部分は旅の途上に寧ろなくもがなの、困難な峠越えであつた。山それ自體に登ることを目的とはしてゐなかつたのである。現在登山といつて山に登ることを目的とすることは、ごく最近に發達したもので、第十八世紀の中頃以來のことである。しかし現代人のアルプス登山は、昔の人人の山越えの旅とは目的を異にしてはゐるが、遼遠の時代から浸み込んだ歴史の芳香は、また私等の登山の興味を、どれだけ深くしてゐるか知れない。

西紀前二一八年の春、十萬の大軍を率ゐ、カルタゴの雄將ハンニバルはイタリヤに攻め入らんとして、ローンの溪谷を遡つてアルプスに掛つた。かれの越した峠は、コールダルジャンティエールであるとか、または小サン・ベルナールとか、或はモン・ジュネーヴルの峠であるとか、史家の間に種々の說があつて分明でない。とも角アルプスに掛つて、嶮峻の山路に大軍は非常の困難を嘗め、氷雪の越路に難行軍十日餘りの後、漸く峠に達した。そのをりハンニバルは、疲弊しきつた部下に對し、遙に望見するイタリヤの野を指して、「われ等は今やイタリヤの城壁に迫つてゐる。否、ローマの都の城壁に迫つてゐるのである。幾日かの後には、そのイタリヤの首都であり城塞である、ローマを支配するであらう」と叫んで、士氣を鼓舞したとのことである。

白雪を踏み締めて　靈峯ユングフラウ初登攀時代の歴史的寫眞。千古に人跡を見かたつた處女峯の白雪を踏んで初めて絶巓をきはめんとする雄々しき人々の面立ちを見よ。むくつけき頬かむりを笑ふかなれ。かれ等の足は今まさに雲を踏み天に昇る喜びに躍つてゐるのだ。

ハンニバルの苦勞も忍耐も、皆ローマに向つてのためであつた。

また西紀前五八年、ケーザルがゴール征伐にアルプスを越してゐる。或は北歐の王侯で、密かに山路をイタリヤに越して來て、その地位等を幾何かの財貨に換へたものもあつた。遠くより來つて旅の途上に訪れるものみではなく、アルプスの山麓や溪谷は、古代より狩獵や放牧を業とした、粗野な人々が住んでゐた。これ等の人々は互ひに山の彼方の幸を求めて交通し、財物を交換しあつてゐる。であるからアルプスにおいて最も早くより人間と交渉のあつたのは峠ではあるが、名稱の付けられたことは山の方が早いのである。

しかしまた峠の名稱が山の名稱に移つたものもある。例へば有名なマッターホルンであるが、その東部に今はサン・テオドルと稱ばれる峠があるが、この峠は昔はマッテルまたはモン・シルヴィウスと稱ばれてをつた。この名稱が、西の峻峯の名稱に變つてしまつた。テオドル峠はローマ時代からの驛路であつたらしく、それは峠から發見せられたローマ時代の古錢の數々、例へばネルヴァ（紀元一〇〇年）、マルクス・オーレリコス（紀元一六〇年）等、諸帝王時代のものによつて證せられてゐる。

峠路の發達は、主として東はドロミテの溪谷、西はモン・セニスの邊りであつたが、第十七世紀以前には、氷河による峠の數が、およそ二十箇所も既に知られてゐたのである。

アルプスの王モンラブン　海拔四一八〇メートル。アルプスの最高峯モンラブンを登攀した歴史は本文に詳しく述べられてゐる。氷河の中に浮ぶ然毅たる勇姿を見よ。

ダンテのアルプス

しからばいつ頃から、アルプスそのものが、興味の對照となり出したのであらうか。氷雪のたゞ荒寥たる、寄ることのできないものとして疎ぜられてゐた山や峯が、深い印象を與へ出したのは何時の頃であるか。思ふにそれは、やはりルネッサンス時代であつたらしい。この人心の更生期に當つて、自然の美も發見せられたのである。

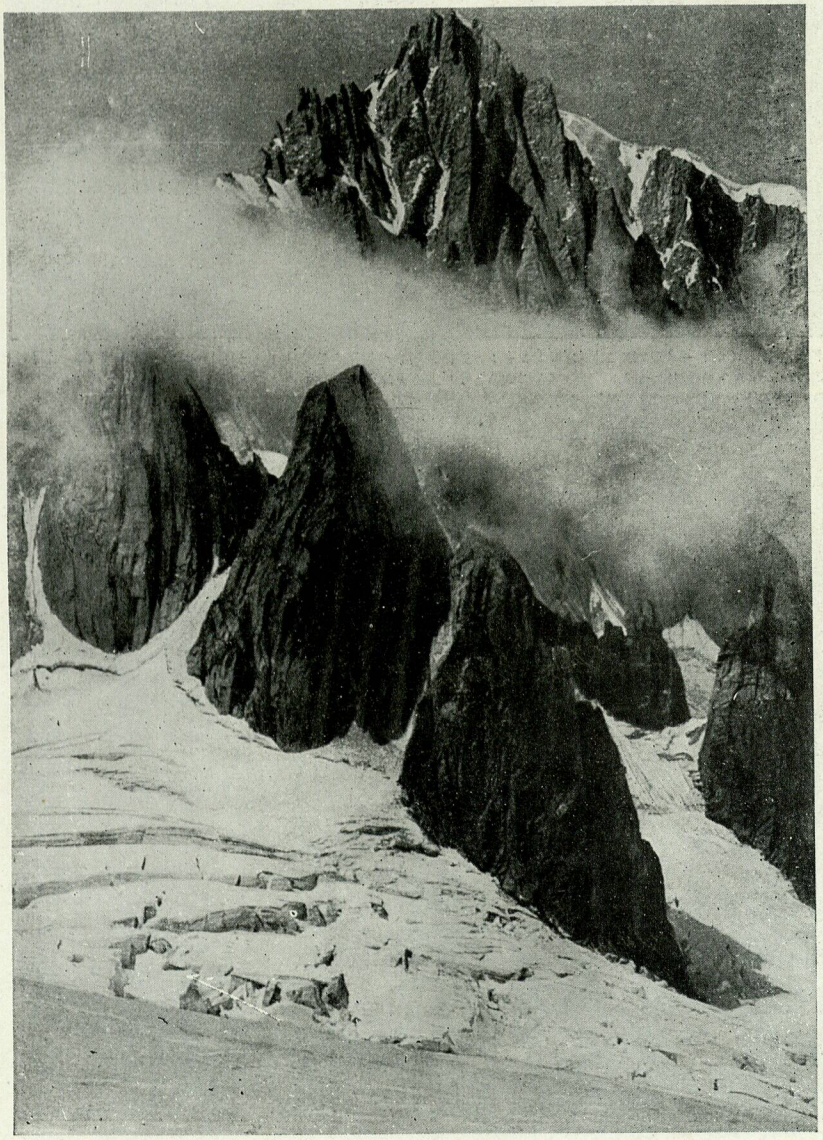
詩人ダンテは、眺望を樂しまんがために、高山に登つたといはれてゐる。恐らくかれは、登山のために登山をした最初の一人であつたらうと、史家ブルクハルトは語つてゐる。そしてかれの「淨罪界」に強い刺戟を受けて、アラゴンのピーター第三世は、カニゴー（二七八七メートル）に登つたとさへいはれる。しかし、一方ダンテの筆に現はれてくるアルピなる語の意味ある山岳は、アペニンの山岳を指

してゐるものであると、フレッシフィルドは語つてゐる。

ダンテに醒めた山岳の美は、次ぎにペトラルカを生んだ。ペトラルカは、地理學者でもあり、製圖家でもあり、且つ詩人でもあつた。

一三三六年アヴィニョン附近のモン・ヴァントウ（一九一二メートル）に登山したかれの記述は、當時の人心の自然に對する態度を描寫してゐる。登山には弟のグルハルトとともに行つたのであつたが、初めリヴィウスの記事にローマ人の敵なるフィリップ王がヘムス山に登つたといふことを讀んで決心して思へらく、半白の王者でさへできることなら、この青春の身をもつてなし難きわけはないと。畢竟當時の社會では、眺望を得んがために山に登ると云ふやうなことは、思ひも寄らぬことであつたのであらう。

登山の際には、山麓の老牧者よりその試みの徒勞であるのと危險なることを諭されたのであつたがかれは勇を鼓して遂に山頂に達した。そして脚下に群る雲海を瞰、且つ展開する山岳の壯大なる景に、魂が奪はれるやうであつた。かれは餘りの感激に打たれ、たまく平生携帶してゐる聖アウグスティヌスの懺悔錄を開いて見たところ、「人々は立ち出でて、高き山と廣き海、または強き奔流と星の行手を嘆賞して身を忘る」といふ句を見た。かれは、眼前に眺める偉大な風景も一の迷誤であるのかと煩悶したといはれてゐる。ダンテもペトラルカも、世の人達に先んじて知らぬ高い世界に憧憬れた。二人を比較するならば、ダンテにより豐かな登山趣味が見出すのである。この頃アルプスの主脈の中、最初に登られた山岳がある。それはモン・セニス峠の東に立つ、五千メートル餘のロシムロンといふ山であるが、その頂にある禮拜堂の中から現はれた三幅



氷河に泛ぶ 偉大なるモンブランはそのそは肩から腰かすらばしらい氷河を讃うてゐる。千古に沈密を包むそのの氷のショーレは死の海のごとくく靜かで冷たいい。しかし王者モンブランはその勇偉なる尖頭を空に嘯いてゐる。

山の幅 この幅廣く がつしりと空をとりしつたた雪切區は峯デンユデンホンルンは（二六六五メートル）から見た（海拔三六四七メートル）の額。大地は潰ゆるともわれは潰えずといふやうな確固不拔の氣概をもつたた山容である。しかもそこに一種の親しみを感じる。

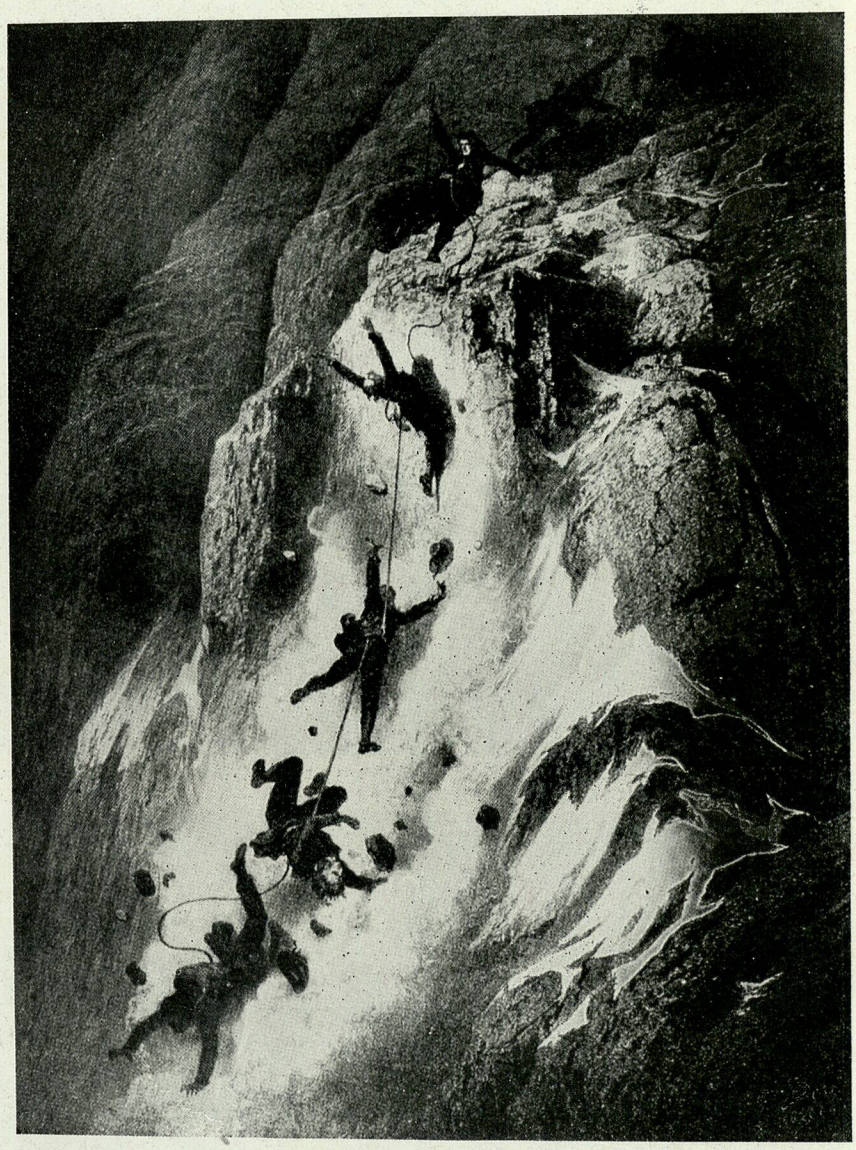
ワイスホルン アルプスの最高峯の一つ。ペンニン・グルップにペルツ屬しエツマルトの北約八キロにあり海拔四五二一メートル。一八一六年四月イタリアンルダン氏によつて初めて征服された。雄々しい姿は勇ましく犯し難い。

ユングフラウの大塊　スイウスアルプス・アルプスの中で最も有名な山のこの塊は海拔四一六六メートル。うらあでウラフグンユ
レアヴと縣ンルベ。
境縣フ・ンスタ・ーアルホルンの西約一七キロメートルの地點にあるこの絕頂をきはめたのは一八一一年にメイヤーと弟兄がじめてのあつた。

キスケンテ峠　スイウスアルプス・アルプスの中の難路キスケンテ峠は海拔實に二五二四メートル。この眞寫は北方から見た峠同上（二）
リクツテンテスキと峠の方北は
七九四メートル）とブリルゼルゲチルェネンの（ルトーメ〇五二三）の壯觀。風と雪と氷に洗ひさらされた山の骨ともいはやうな感がするが。

對によつて、アスティのロタリオなるものが、一三五八年にこゝに登り、これを奉納してゐることが發見せられた。

また一四九二年に、フランス王シャール第八世が、ド・ボープレといふものをわざわざ派して、ドフィネの山脈の七不思議の一といはれてゐるガルノーブル附近にあるモン・エギールを登らせてゐる。その登山には繩や梯子を用ゐたと記されてゐるが、頂上は恰も牧場のやうに羚羊群り



山の犧牲　アルプスの名山マッターホルンはモンセニスはこれ初めて登攀の時難遭した大登山者牲犧の人四はこれ出し詳しい。文本はスンマロいしまたいの攀登初めてゲルの山の難遭した時想を描て畫挿の聞新のリパたい

鳥や燕も飛んでゐた、そして頂の端に下より望見のできるやうに、三個の十字架を建てたといはれてゐる。

ダ・ヴィンチとモントローザ

レオナルド・ダ・ヴィンチの名は、登山史上また不滅である。ダ・ヴィンチの繪畫に現れてくる山岳風景は、主としてロンバルディヤの丘陵であるが、かれはまた「イタリヤとフランスとの國境の山」に登つてゐる。かれがイタリヤとフランスとの國境の山と指してゐるのは、今のヴァリスの地域であつて、當時の政治的または地理的概念では、このヴァリスを兩國國境邊と見做す程度であつた。かれの登つたのはモン・ボソといふ。その手記によれば、七月の半ばに雪は降り空は濃く澄んで、太陽は平野に見るよりも輝いてをつたとある。このモン・ボソといふのは、今のモントローザ、歐洲第二の高峯の一部に屬する山である。ダ・ヴィンチはこの偉大な氷雪の大山塊の中に、思ふまゝにアルプスの空氣を吸つて喜んだのであらう。モントローザの名は、初め山麓のアオスタの谷の方言に、氷河をロエザといつたのであるが、一五七四年チューリッヒの牧師ヨシヤ・シムラーによつて、この山塊を指稱するやうになつたものである。このヨシヤ・シムラーは、雪線以上のアルプスの登山の困難と、その克服法とを